

---

# ほんの少し違う

やきいか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ほんの少し違う

### 【著者名】

やさしいか

N1498N

### 【あらすじ】

少しだけいつもと違った。  
なんてことない些細な出来事。

(前書き)

氣分転換に書いた駄作。  
結局中途半端になっちゃった。

仕事を終えて帰路につく。いつも通りだ。

会社から10分ちょっとの駅まで歩いて帰宅ラッシュのホームをすり抜ける。

プアーネン

絶妙なタイミングで電車が入ってくる。

「ぬおつ……」

ドアが開くと先頭に立つ人が降りてくる乗客を押しのけて乗り込む。それに続く形で進み始めたので後ろから押されてしまった。

ガタンガタン……ガタンガタン……

次は 駅 駅

車内アナウンスが流れるが、今日が終わりに近付いているのだと感じる。

電車の窓から見える夕映えに黄昏の街並みが印象深い。秋口に入ろうかという季節の節目ということもあり、正面に見える夕日がより一層綺麗に見える。

都会でありながらこの景色が觀れるのはとても有り難い。

降りる駅が近付く。

改札を抜けて駅と直結している量販店へと足を向ける。

「今日の夕食は何にしようかねえ？」

今日は……そうだな。

とろーりオムライスが食べたい気分！

よし決定。

作ったことはないが、まあなんとかなるだろ？

「 金になります。袋はお使いになりますか？」

「 大きめのを2つお願ひします。」

H「がざつなんて変な時代になつたお陰で袋まで金を出さなきゃ

貢えなくなつちました。

袋に使わなくなつた分の化石燃料たちはどうぞの道楽の遊びのためにしか消費されないつてのに。

「とかいいつつその道楽が一番貢献してたりするんだよね。」

ポツリと一言

某青狸口ボのヒロインも言つていた。

人間つて矛盾した行動をとる生き物なのよ

小学五年の言づ合詞ではないが全く持つてその通りだね。

「だつて俺も、ツ……ブハア……身体に悪いと注意しながらこんなもん吸つてるんだから。」

やめられない、止まらない。

まつ、吸いたいやつは吸えればいいのさ。

その結果体調悪くして病院に行つても本人の責任だし?

病院は儲かるし、本人は体調が戻ればまた吸うし、生産者は儲かる。決して良い流れではないがこれもまた社会の仕組みの一つだよね、うん。

「さて、帰ろかね。」

そう呟き再び帰路につく。

家はこの量販店を裏から出てバスに乗つてすぐのところだ。

「雨……」

パラパラと軽めな雨が降つてきたが雲が厚いので本降りになつそうだ。

バスの時間は……「わー、ギリギリっぽいな。

バスが来るまでもう一本吹かすことじよつ。あ、もちろん携帯灰皿は持つてますよ？

携帯灰皿に煙草を押し込むとタイミングよくバスが来た。  
雨はまだ軽い。

「あらがとうございましたー。」

空気が重くなつてきたのに空模様が相まってバスから降りると少し早めに歩いて信号を渡る。

アパートの一階、外階段を上つて一番奥が俺の部屋だ。

玄関の鍵を開けようとしたところでちょうど雨が本降りになつた。

ザアア——

「今日は運勢でも良かったのかね？」

ガチャ  
キー……

「ただいまつと」

「んー、おかえりー」

帰宅の挨拶もほどほどに荷物を台所へと置いて着替えるために居間へと向かう。

1LDKのトイレシャワー付きでそこそこな部屋で家賃も3万円と良心的。

安さの秘密は押し入れと立地にある。

実はここ戦時中のおり救護詰め所となつていて、そのまま病院が造られて今から10年ほど前に潰れたのだとか。

普通なら廃病院とかになつてオカルトな雑誌に載つたりするのだろうが、何を考えたか役所と建設会社が結託して解体、その後何故かマンションではなくこのアパートが建てられたらのだが、結構前の話だつたし当時は別の所に住んでいたので全部大家さんから聞いた話だ。

まあ病院があつた訳だから……ねえ?「多忙に漏れずアレですよアレ。世の中に未練のある方々がでるんだそうですよ。まだ一度も見てないけど。

なのでなかなか入居者が現れないので安くしたるーとなつたとか。

押し入れはあれです、雨漏りするんです。俺の部屋はもう補修したけどね。

こうじつ雨の日は、入居者のいない部屋からはまだ雨漏りしてゐる音が聞こえるのだ。

## 閑話休題

普通のオムライスであれば別に作るのには困らないが今回は上からとろみをつけたソースっぽいものもかけるので味の調節が必要だな。と言つても凝つたものは作らんけど。

俺はきざみネギ入りの卵が好きなので無条件で溶き卵に投入。フライパンに油をたらして火をつける。冷凍しておいたご飯を取り出して二膳分ほどレンジにほいつりんで解凍しておこう。

ソースは……醤油ベースに適當でいいか。

フライパンに溶き卵を三分の一ほど流し込む。ちなみに使つた卵は五個。半熟が好きなので弱火でじっくりと卵を焼いていく。

チンッ

フライパンに蓋をしてご飯を取り出す。

何か味付けしようかと思つたが、ソースを絡めて食べばいいやといふことでそのまま半分ずつ皿に盛る。

……ソースの一度掛けもありかな。

「……うと、焦げちゃう」

蓋を外して残りの卵を流し込んでなじませてからまた蓋をする。

30秒くらいたつたのでまた蓋を外して、飯の上に盛り付ける。ネギがいいアクセントになつてゐるじゃないか……。

ちなみにちゃんと二分になるようこつとつこつとつてある。

最後に適当ソースをかけて……おお、良い香り。

おぼんの上に料理と残りのソースを載せて居間へと向かう。居間の中心にはコタツが置いてあり隅にはテレビ、正面にはベランダがある。ホントに普通だ。

コタツの上に料理を置いていく。

「おおー、オムライスだー」

「適当に作ったから味付け足りなかつたら塗ってくれ。それでは『いたさまで』

食事中の風景は名曲いじ想像でお任せします。

『いたさまで』

「ん？ 雨止んだな。」

「おー！ ホントだー！」

「テレビでは一時局地的な雨とか言っていたが、こんなすぐ上がるもんなのかね？」

「んー、結構いい時間だなー……。」

「よし。私帰るねー！」

「おー、気をつけなー」

「じゃあねー！」

「ガチャ、バタム！」

「…………」

「…………」

洗い物も一段落したのでお茶を淹れてコタツに潜り込む。

ズズツ  
ズズツ

「…………」

「あいつ、結局誰だつたんだ？」

艶やかな黒髪で緩い三つ編みを後ろに流し、端無し眼鏡が似合つて  
ても可愛い妙齢の女人。

名前も知らない、女人。

e  
n  
d

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1498n/>

---

ほんの少し違う

2010年10月22日00時33分発行